

第1章

都市計画史の定義、意義、方法

The What, Why, and How of Planning History

カローラ・ハイン

都市計画は複雑な領域で、多数の専門用語、様々な解釈、空間と時間を超えた多様な応用を伴う。歴史家たちは様々な視点から都市計画に言及してきた。Urban Planning, city planning, town planning, urban design—英語で仕事をする実践家や学者たちは、空間の設計や規制、それらの物的形態、それらの用途、機能、影響などを様々な用語を使って記述してきた。さらに他の言語、慣習が、それらの活動を多様な、時に発散的な方法で述、分類してきた。この本で扱い、言葉のクラウドに示した都市計画史や都市計画史学を記述するために用いられる用語と概念の多様性は、主題の複雑さ、アプローチや学問領域の多様さを端的に表している(図1-1)。都市計画史に登場する主体や方法論、道具もまた、多様である。政治家、エコノミスト、都市計画家、アーバンデザイナーらが、美的、経済的、政治的、技術的な営みとしての都市計画の多様性を考慮した様々な種類の介入によって、物的な空間を生み出してきたのである。異なる都市計画のアプローチが一つの都市で共存している港湾のデザインが経済的要求と工学的計画の結果である一方、代表的な官庁街は政治的関心や美的都市計画の成果であろうし、旧工業地帯の再生は社会的ニーズや多用途に焦点を絞るかも知れない。都市計画はまた、ソ連時代の空間開発に翻訳された五か年計画から都市形態を生み出す社会工学的な建設計画、都市美的ニューアバニズムまで、国によって、文化によって、変化するものである。そうしたコンテキストが都市計画の実践、教育、そして歴史をかたちづくる。

時間の変容は、用語や領域の相違をさらに複雑なものにする。都市形態のデザインは近代都市計画よりもはるかに長い歴史を有する。4000年の歴史をもつ中華帝国の都市、ミレットのヒッポダモスのギリシャ都市の計画、マヤ文明の計画都市、ルネサンスやバロックの都市計画、インディー法などである。国や地域の指導者たちは膨大な資金と人力をこれらの都市計画の実現に注ぎ込んだ。こうした初期の介入の多くは、現代都市においても見ることができる。それらは、デザインや変容、保存の公式の参照やフレームワークとして、計画文化のガバナンス構造、組織や法律、規制の経路依存を通じて、様々なかたちで実践を生み出し続けている。より具体的には、多くの都市がそれらをコピーし、後の時代の都市計画家たちは、それらから学び、また借用してきたのである。

19世紀後半、都市計画のひとつの型が英国、大陸ヨーロッパ、アメリカで誕生した。それは産業革命がもたらした都市の病理に対応するための社会改良を探求する合理主義者、モダニストによる探求だと考えられている。都市計画の実践家たちは、急速に変容していく都市、新しい生産と消費の形態、制御不可能な人口増加、新しいタイプの交通・通信などに対応しようとした。要するに、彼らは衛生、住宅、交通を対象とした。工業化と植民地化が進展するにつれて、コロニアルおよびポストコロニアルの権力の地理学、政治的な忠誠、企業の利害、都市計画家たちの専門家ネットワークに続いて、様々な都市計画のモデルが生まれた。第一次世界大戦前、エベネザー・ハワードが1902年に発表したガーデン・シティの

概念の普及は、事例として際立っている。ドイツ、フランス、日本、ロシアのライターたちがハワードのスキームにかなり早く言及し、ハワードの著書の全体を彼らの言語で翻訳した（図 1.2、7.2、11・3）。これらのコンセプトの普及はつつき、チェコ語、ポーランド語、中国語、アラビア語に翻訳され、国境を越えた都市計画のコンセプトについての新たな研究の可能性を切り拓いた。

都市計画の領域や焦点は、政治的・経済的発展、社会変容とともに移り変わってきた。今日、都市計画は何よりも将来に目を向ける分野であり、その中では過去の展開やアプローチの役割は限定的であるが、変化してきている。長いこと、古い計画はたまたま引用されたり、まったく無視されるかであったのに対し、ある建築家や都市計画家たちによって、過去はツールボックスとみなされるようになってきた。

この変化は、都市計画教育に反映されている。カリキュラムやその時代による変化を一見すると、都市計画スクールは都市計画史よりも都市計画理論をますます好むようになってきていて、その多くでは都市計画史家教育はなされていないように思える。しかし、都市計画とは何か、都市とは何かを空間と時間の中で理解するために、都市計画史は多様なイデオロギー的、理論的立場への認識を深めている。都市形態や機能の近代性を批判的に捉え、都市計画の概念や空間の表象に疑問を投げかける新しいアプローチも生み出されている。

これらのダイナミクス、歴史的な発展を認識し、このハンドブックは都市計画は固定されたものではなく、フレキシブルなシステムであるとう考えから始めることにする。ネットワークされ、文化の壁を越えた偏りのないアプローチを採用し、俯瞰的に書くことで、本書は、アメリカ人建築家バックミンスター・フラーのダイマキシオン地図のように、世界をもう一度、開いたり、折りたたんだりすることを想像する空間的伝統と文化的景観を切り拓いていく。

このハンドブックは、都市計画史を様々な領域が関与する学際的なものとする。都市史家、経済史家、社会史家、建築史家、ランドスケープおよび環境史家は皆、住宅、建設、地方自治体、社会政策、ユートピアニズム、都市形態などを含む、より大きな研究プロジェクトの一部として、プランや都市計画の問題に取り組んでいる。これらの分野は皆、確立されていて、それぞれのジャーナル、会議、著名な出版物を持っており、そこで都市計画史分野の研究を進展させることもできる。これらの各分野の存在を念頭に置いたとき、**Planning Perspectives** や **Journal of Planning History** の発刊趣旨にそれぞれ書かれている、都市計画やプラン、都市計画家の歴史、特にアメリカでは都市地域計画に焦点を絞った専門雑誌を持つ都市計画史の分野としての固有性やレゾナートルは何なのだろうか？なぜ、私たちは都市計画史を必要とするのだろうか？そして、それはどうやって行うべきなのだろうか？この本は世界中の様々な分野の学生や研究者、専門家が都市計画史の歴史的な起源、方法論的実践、学術的成果を理解するための基礎的な書籍である。

都市計画史とは何か？

このハンドブックは、都市計画史の意味するところの広がり地図を描く。この本の著者の何人かは、建築やアーバンデザインのアプローチを採用し、都市計画史を物的環境のフォーマルで美的な外観を記述するものと定義している。他の著者たちは、都市計画史は社会科学由来のものだとし、また他の著者は都市地理学や政治・社会・経済史に焦点を当てる。

都市計画史は1970年代に生まれた分野で、都市計画史に関するいくつかの組織や雑誌はあるが、このハンドブックは、この分野の研究の基礎を初めて提供するものである。例えばピーター・ホルの「Cities of Tomorrow」のような幅広い視野をもつ英語で書かれた書籍を補完するものである。ピーター・ホルの本は、都市計画の歴史や理論、実践について探求した最初の本の一つであるが、都市計画史という領域自体について深く検討したものではない。いくつかの論文集は19世紀、20世紀のオリジナルの文献を収録している。こうした本以外で取り込まれている、グローバルな都市計画文化に対する広範な疑問もまた、歴史的な軌跡やそれらの特定の国や地域の伝統との関係についての熟考を含んでいる。しかし、このハンドブックはそうした類のものとは大きく異なっている。この分野の指導的な研究者たちの新しい、オリジナルの論文から構成されており、それ自身がクラシックになるであろうものも含まれている。

このハンドブックは、学際的で国際的な都市計画史の前提や到達点、カギとなるプレイヤーや組織を初めて確立させるものである。そして、新しい方法論的、理論的、タイポロジカルなアプローチを探求することで、その確立された叙述を乗り越えていく。幅広い叙述が都市計画史自身のリライト、再考、再構成において重要だと考える。例えば、もしサブサハラ都市計画が都市計画史の規範から孤立しているとすれば、それらの歴史に関するより広範な理解が変革をもたらす。このような再検討は都市計画史が書かれる場所や言語への形式や背景にある前提への疑問を含んでいる。それは都市計画の広範な歴史叙述のことであり、都市計画史の重要な書籍の多くはイギリスやアメリカで最初に出版されている。それらは結局のところ、ある地域や国の物語であって、異なる言語のパターンや異なる政治、経済、社会、文化のアプローチによる別の方法と並行させる必要があることを強調しておきたい。複数の例えば東南アジアや南アジアの都市計画の歴史や歴史叙述を熟考するためには、著者は都市計画を国家権力の表現としてのフォーマリティの変容との関係で理解しなければならない。このハンドブックは学問領域を拡張し、研究者にどのような結びつきがまだ描かれていないのか、どのようなネットワークがまだ知られていないのかを問うことを奨励する段階を設けている。

このハンドブックは、都市計画史に新たな展望を追加する。学問及び地理的な限界を乗り越えようとする近年の著作に基づいている。都市計画史の研究は、この本の著者たちによるものも含めて、ナショナルな物語を乗り越える必要性を含む都市計画史を書くことの課題について説明を始めているし、経験的、叙述的研究を超えて、理論を発達させている。そうしたアプローチは包括的にはなりえないが、このハンドブックは少なくとも新しいグローバルな都市計画史を具体的に示し、これまでと異なるアプローチ、地理的パターン、言語、原理への洞察を与えてくれる。異なる分野でのアカデミックな都市計画史のパラレルワールドを切り拓き、共通の言語、用語、方法論、理論の登場を促すことが狙いである。アプローチの多様性は、都市計画史の議論を豊かにする。また、都市計画に関する著作に含まれる学際的な論理を浮き彫りにさせる。

何故、都市計画史なのか？

この分野の過去の成果を検証し、グローバルな課題が総合的な新しい手段を求めることで、都市計画史はわれわれの都市、地域、国における過去の都市計画の影響を理解するのを助けてくれる。同時に専門家

の仕事として都市計画の将来を想像することにも役立つ。都市計画は、19世紀中ごろに、計算、推定、過去から導き出された公的な基準に基づいた将来の開発に導く介入を提案することを求められた。都市計画家はこの複雑な課題を、しばしば誠心誠意で引き受けてきた。彼らは政府や地方のエリート、時に市民組織と協働してきた。都市の拡張、国の改変という要求に応じてきた。彼らは新しいインフラを提供し、機能的なゾーンを特定してきた。平和なときも、戦時も災害時も、都市の未来を提案してきた。既存の計画された空間と確立された都市計画の文化を彼らの介入に統合しようとしてきた。インフォーマルな都市づくりがより目立ってくる場合、都市計画史は計画的介入のモチベーションを理解する機会を提供し、将来の介入の基礎として働く。

都市や地域の歴史の変遷の中での都市計画の役割に対する理解を深める手段として、都市計画史は歴史的な都市計画の実践の欠点、革新的なアプローチの要請を理解することを手助けしてくれる。例えば、世界のある地域では、都市計画はより経済的、社会的、あるいは人種間の不平等を解決するというよりも、それらを生み出してしまっている。より詳細な分析によって、この欠点の理由の理解が進む。他の地域では、かつての植民地都市計画の実践をひもとく試みは、法的な実践から美的で象徴的な相互作用までの幅を持つ植民地都市計画の実践の複雑さの総合的な理解からの恩恵を受ける。さらに、地域によっては計画市街地よりも大きなインフォーマルな市街地の登場は、都市計画が必要とする柔軟性や計画市街地とインフォーマルな都市開発との変化する交点についての問題を提起する。多くの介入は単純に失敗したか、柔軟性を欠きすぎていて都市の変化を受け入れられなかった。つまり、全ての計画が都市開発を成功に導くというわけではないのである。

都市計画は広く私たちの身の回りの環境をつくりだすが、最も必要とされている時に、大きな批判にも向き合ってきた。ここ10年は、世界中の都市や地域は気候変動からグローバルな水面上昇、移民、人口増までの増加する課題に向き合ってきた。そして、レジリエントなシステムをつくるための総合的な解決策が必要とされてきた。都市計画史は、将来のレジリエントな都市計画の概念化にあたって、将来の課題をとりあげ、過去からの教訓を統合する重要、有意義な道具となりうる。アメリカの都市計画史家のラリー・ヴェールは批判的レジリエンスという考え方を紹介し、こうした議論を災害時やポストトラウマ期の権力や政治の問題とより関連させていくことが必要だと論じた。都市計画史家は歴史的な災害からの復興の分析の訓練をよく受けていることを指摘し、ヴェールは現代や将来のレジリエンスについて考える際に、この分析ツールをより広く応用すべきだと考えた。私たちはイデオロギー的な回答や将来の課題のみに取り組む技術者を必要としない。私たちは歴史の感覚を備えた都市計画家と計画のセンスを備えた歴史家を必要としているのである。

都市計画史家は過ぎ去った未来のための過去の計画の分析においても、将来のビジョンの課題を指摘するなど、重要な役割を果たす。未来のビジョンを評価し、時に蘇らせることで、現代のデザインの土台を提供する。首都としてのベルリンの都市計画はビジョナリーなプランが世界中の都市計画の議論にインパクトを与えた事例である。アドルフ・ヒットラーお気に入りの建築家、アルベルト・シュペアの記念碑的なプランから1957年から1958年の首都ベルリン設計競技におけるメガストラクチャーのプランまで、ベルリンを対象とした決して実現しなかった様々なビジョナリーなプランは後の時代のプロジェクトに情報を提供した。これらのビジョンは実現したものと同じくらい、いやそれ以上にインスピレーションに満ちていて、時空間を超えて、創造力のある基盤のある場所において、後の意思決定や開花に影響を与えたのである。シュペアのプロジェクトは、実現しなかったが、第二次世界大戦終了から1989年の

ベルリンの壁の崩壊後までの西ベルリンの都市計画決定を、あらゆる記念碑的な要素、軸線を否定した後の世代の都市計画家たちとともに導いた。他の考え方も生き続け、多くは公共機関や企業の手で断片的なかたちで実現した。欧州や日本で見られたメガストラクチャーなビジョンは、大規模な地下商店街や歩行者専用ペデによって連結された巨大な超高層建築、浮遊式の空港などの大きなインフラの祖先と見ることができる。空間計画はその足跡をシムシティやその他のコンピューターゲームに残している。そこでは、実際の都市の歴史がビジョナリーなプロジェクトや日常的な都市経験と交わっている。

どうやって都市計画史を書くのか？

都市計画という観念は、産業革命後の近代性や近代化という概念、都市の物的環境の改変が人々の生活状況、社会的文化的なパターンを変えると考えるという考えと密接に関係している。都市計画史家は、指導的な都市計画家の努力、実践、介入を記録し、近代性の歴史を描くことに貢献する。次に、このハンドブックは欧州や北アメリカの初期工業化国と都市変容を探求した研究者たちの固定化された観念を超えて、都市計画史とその近代性との結びつきを記録し、再考する。工業化と関係するものとしての「近代」の定義の再検討により、本書は都市計画の概念を定義すると同時に、その定義を更新し、「進歩」、歴史的な「アヴァンギャルド」な活動というかたちでの都市計画の概念を乗り越え、ヴァナキュラーや非計画的な空間と結びついた計画的介入を探求する。歴史家のマンフレッド・タフーリは次のように書いている。

現代都市計画の歴史はアヴァンギャルドな仮説の歴史とは全く一致しない。その逆に、ある文献学的な調査が確かめたように、都市計画の伝統はあらゆるアヴァンギャルドな経験の外で構築された基盤に根を持っている。このことは都市計画の歴史とモダンムーブメントのイデオロギーの並行する歴史との関係についての徹底的な再検証の必要性を浮かび上がらせる。もしこの方法が採用されれば、多くの神話が崩れさることになる。

都市計画における近代の概念への疑うことで、研究の最前線である新しいテーマや問題が生み出される。都市計画は、社会工学、交通工学、その他の客観的と思われる方法を採用することで、自らを科学として打ち出してきた。しかし、都市計画家や歴史家で特定の介入の結果に疑問を持ち、検証したような者は殆どいない。さらに拙いことに、ある時代に健康に対する科学的な回答として提示されたものが健康ハザードとなってしまっていることもある。例えば、1920年代や1950年代の緑化型住宅プロジェクトにおける街区や建物は、現在、セキュリティや美的な面、歩行者環境にとっての重要な要素、今日の学者たちが肥満との闘いやコミュニティの醸成にとって本質的だと認識している課題などの面から批判の対象となっている。歴史的な視点から進歩や近代性についての前提や都市計画をつくってきた道筋に疑問を投げかけることで、本書は近代都市の登場や文化的建設としての変容をどう理解するのかを示す。

西洋、つまり、欧州、アメリカ、オーストラリアの歴史記述の方法の隆盛の結果、その影響批判的に見出されたり、反映させたりしたものというよりも、当然のものであるとみなされている。メソポタミアはギリシャやローマ帝国と結びついていたが、現在はアラブ世界に属しているため、ヨーロッパ人としてみなされる一方で、現代の書物ではしばしばそれらとの断絶が見られる。アジアの言語や都市計画史へ

のアプローチと欧州や北アメリカの言語や議論との間の交流が難しかったため、研究者たちは長いこと、日本は都市計画の実践の受益者であって、それらを翻訳したり、生み出したりしたわけではないと考えてきた。

歴史記述は決して客観的ではない。しかし、それが単純に主観的なものとうことではないことに慎重になるべきだろう。そのために、歴史家は（都市計画史家も含む）、重要で適切な証拠を提示する。歴史家によって検証された「実践の歴史」は、過去に人々がどのように行動したかに焦点を当てるが、通常は現在に対する過去からの示唆を考慮することはない。それとは対照的に、実践家の「実践の歴史」は、現在の仕事のために歴史に目を向けるが、過去自体のもつ価値には無頓着である。これは越境的な分析においても真実である。例えば、しばしば他の文化「から学ぶ」という本は、深く理解しようというよりも、都市計画に関する議論を起こそうとする。このハンドブックは都市計画史を明確に未来志向の分野の歴史として扱い、この分野がどのように過去を叙述してきたのか、どうやって実践家たちは過去を未来のために動員してきたのか、変わりゆく歴史を明らかにしていく。

都市計画の著作権、空間性、仮設性への疑問は、衛生、インフラ、住居などの問題、首都のデザイン、インフラのデザイン、ヘリテージ（過去そのものの活用）に焦点を当て、都市計画の発展経緯や対象を跡付けながら、都市計画史において何度も繰り返し提示されてきた。しかし、都市計画史は全ての領域、時代、実践を同じ方法で説明してきたわけではない。各時代の歴史を書くことは、歴史をつくることと密接に関係してきた。初期の都市計画史のいくつかは、ある都市計画家のグループや特定のイデオロギーを正当化するように書かれた。時に（建築や都市の）歴史家は、アイコンックな運動の一部をなした。ケネス・フランプトンはよく知られているようにモダンムーブメントを記録したし、川添登は日本のメタボリストのために、彼らとともに書いた。こうした仕事は、特定の運動と連携し、知的に接続されていた一方で、歴史家はどうやってより一般的に近代都市とその計画の公式の物語を生み出してきたのか、という問いを生み出す。

都市計画史家が過去を物語るとき、英雄譚を生み出すリスクを背負っている。都市計画のアクターや都市計画史のヒーローは、しばしば彼らの「関心」や「英知」に従うエリートの白人男性である。これらの物語を強調することは、必ずしも歴史家の意識的な目標であったり、特定の文化運動の結果であったりする必要はないのだが、他のプランや都市計画家たちを無視し、祝賀的な記録を生み出すことにつながる。結果としての都市計画史は特定の政治的、社会的、経済的、文化的文脈への理解を欠いた、彼らの業績リストとして読める。オースマンやセルダ、ハワード、ル・コルビュジェ、ロバート・モーゼス、CIAMと彼らの代表的な作品に関する研究は山のようにある。批判的な歴史であったとしても、これらは通常、著しく目立つプロジェクトやイメージの一類型に留まっている。

英雄譚はジェンダー構造を固定化するリスクも持っている。しかし、女性が常に都市計画に関わっていたわけではない。初期には都市計画家として活躍した女性は数少ない一方で、建築家のウィルヘルム・スティアーとともに貧し人々の都市に対して提案を行い、よく知られている女性による都市計画的介入を確立したドイツ人のライターで社会活動家のベッチナ・フォン・アーニムのようなアッパークラスの女性たちは貧困者を助けようと試みた。1920年代、30年代までに、女性は専門的な都市計画家になり始めた。キャサリン・バウアーやその妹のエリザベス・バウアー・モック、ジャクリン・ティアウィットなどはその例である。都市計画史には、フランソワーズ・ショエからアニー・フォーコート、スーザン・ファインSTEIN、レオニー・サンダーコック、ドナテラ・カラビ、ヘレン・メラーなど、革新的なアプロ

一冊を持った女性のリーダーたちがいる。これらの著者の多くは、このハンドブックで言及されているが、女性の視点からの都市計画史の全体的な説明はまだ生み出されていない。

都市計画史においてまだ十分に認識されていない都市計画のその他のパターンに、工学の歴史がある。工学の歴史は都市計画の歴史と密接に関係するが、歴史家はエンジニアの都市計画に対する貢献を十分に認識していない。都市計画家が非計画的な空間を秩序的で計画的な空間に置き換えるという目的のもとで新しい技術を採用する方法について研究することは、長期的な都市計画の物語における新たな関係を明らかにするかも知れない。都市計画家は発明家ではなかったが、推進者もしくは執行者として工学的な対応を採用してきた。ル・コルビュジェのような夢想家は、工学を促進し、それをまとめた。エレベーター、鉄道、自動車、飛行機、これら異なる交通手段は全て都市形態と機能の拡張的変化の誘因となった。鉄道と自動車は郊外のための機会、道具を提供し、飛行機はそれぞれの都市が郊外部と結びついている以上に密接な都市間のネットワークの形成を可能にした。都市計画家や建築家が変容を支えるデザインや理性を提供したのに対して、エンジニアは自然の力への対抗を最終的な目標に置いた。新しい素材は、定期的に洪水に襲われていたデルタ地帯、地震や津波の被害を受けやすい海岸沿いや川沿いの地域、極暑や極寒の地域などで、水害、地震、天候から守ることができる建物や都市を可能にした。しかし都市計画はある程度の総合性や社会的環境的機能を含意するのに対して、エンジニアの視野は狭いまである。

さらに言えば、クリティカルな都市計画史や失われた物語への着目は、未来の課題に取り組む都市計画の基盤となる。例えば、石油の物的、財政的な流通の歴史的分析は、工場の生産、管理、小売り、付随空間についての需要を、その広告、芸術、建築、都市形態などの物的環境における表象とともに可視化し、近代都市の形成の理解を助けてくれる。こうした研究は、目前に迫ったポスト石油の未来における変化の予測や設計に役立つ。機能していない製油所やタンクの改修や転用、石油工場と本社とを結ぶインフラやその他の接続の再検討、より循環的な経済に向けた地球全体の再組織化などである。このようなシステムやダイナミクスがどのように歴史的に発展してきたのかを理解することで、都市計画家はそれらの新しい未来を想像することができる。

過去と現在、未来を結び付けることで、このハンドブックは都市計画教育機関やその他の学術機関において、都市計画教育や多様な教育システムにおけるその歴史を問い直すことを手助けする。このことはデザイン思考を都市計画教育の文脈だけでなく、社会科学の部局においても統合し、教えること、新しい展望に寄与する関連するカリキュラムを発展させることを意味するのかも知れない。このハンドブックは、このプロセスの種をまき、補完的な研究を招来することを期待している。

都市計画史の将来を想像する

このような複雑なトピックを一冊の本で扱うことは無理である。この本は全ての国、都市、トピック、歴史的時代を扱っているわけではない。扱えたかも知れないテーマ、例えば、都市計画と自然、世界の中でも研究の少ない地域での都市計画、社会計画、都市計画のスケールなどは2015年に開催した都市計画史ワークショップで議論した。様々な理由から、殆どは実務的な期限のため、このハンドブックには収録することはできなかった。このハンドブックは定義の問題（計画的、非計画的とは何か？）に触れている

が、公式見解無しに体系化されたそれらは、また別の本の主題である。

文化、コロニアリズム、ジェンダー、実地調査などの用語に含まれるバイアスを認識することは、都市計画史家がこの本を乗り越えていくために必要なことである。例えば、それはお互いに戦争を戦った国を含む都市計画史に影響を与えるだろう。ジェンダーに対する疑問は、特に男性が公共領域を独占している社会での都市計画を扱う際には中心的な課題になるだろう。疎外の問題や女性の役割を問うだけでなく、男性らしさそれ自身の構築についても考慮すべきだろう。欧州や北米人による中国などのメガシティの分析において詳述される理論の役割をしっかりと考える必要があるだろう。それらはこうした都市の個性をその文化自体の持つ理論を無視している。都市計画史家のための越境的な仕事は、海の都市化、ドリリングプラットフォーム、エネルギーパーク、その他の海上浮遊構造物などの増加など、エネルギーネットワークやフードランドスケープ、商品の流通とその物的環境への影響に関する研究などに関係してくるだろう。

ハンドブックの構成と全体的な貢献

このハンドブックは、19世紀半ばの分野としての誕生以降の都市計画の歴史を探求する。欧州—アメリカ—オーストラリアの伝統を認識しつつ、脱中心化し、グローバルなアプローチとテーマを考慮した新しい方法を紹介していく。このハンドブックの著者たちは、英雄やユニークなアイデアの歴史という伝統的な都市計画史の描き方への挑戦から始めた。現在の都市計画史の状況乗り越え、新しいグローバルな立ち位置と新しいアプローチの両方を提供し、公式の図像学を問い直し、他の学問領域を取り込み、世界の異なる場所を探求する。このハンドブックは英語文献に焦点を当てることのバイアスを乗り越える最初のステップを確立し、新しく学際的で、多文化的でポストコロニアルなアプローチを開発する。サイト、ダイナミクス、タイポロジーを検証し、この分野の状況—その到達点や欠点、将来の課題を明らかにする。本書はこの分野を定義する基盤となり、研究者や実践家、学生たちが革新的な研究を行うための契機となる。

都市計画や都市計画史の広範な成果、課題、ニーズを扱うために、このハンドブックは二つのこと、つまり都市計画の歴史を描くことと都市計画史の歴史を描くことの両方を行う。そのバランスは章によって様々である。真に国際的な都市計画史やこれらの成果を比較するユニークな機会を伴って、より広い読者を提供する。4部38章は都市計画史の学術的な記述—コアとなる書物、重要な人物、組織、推進者、教育、実践に対する洞察を与えてくれる。都市計画史の記述を地理的、時間的な関係の中で位置づけ、理論、方法論、スケール、文化を考察していく。

これらの歴史的考察は、より古いダイナミクスを認識する一方で、近代都市計画の始まりである19世紀半ば以降の時期に焦点を当てる。歴史分析と将来の都市計画への洞察の両者を豊かなものにするために、この本は都市計画史がどのように書かれ、教えられているかに注意を払う。それぞれの著者はさらなる探求に資する新しい展望を開き、都市計画史家が活発に取り組んでいるが、体系化がなされていない分野の文献を特定する。トピックの選択が政治的な議論や社会の変容を反映、並走、先行していく場を明らかにしている。

このハンドブックは、長さの異なる4つの部と補足とで構成されている。第一部は「主体、理論、方法、

類型」についての最先端の問いを説明している。この4つは国際都市計画史学会の著名な研究者たちの著作を通じて、都市計画史のサブ領域として時間をかけてかたちづくられてきたものである。これらの近年の探求が、第2部「時間、場所、文化」で現在の学問では見落とされているトピック群の説明を始める舞台を用意し、欧米的都市計画史からグローバルな都市計画史への展開、グローバルな言語システムにおけるグローバルな分析のための枠組みの開拓へとつなげていく。次の章は、地域的な物語、特定の政治的、経済的、社会的、文化的枠組みに関するものである。第三部「場所とダイナミクス：課題、運動、テーマ、論争」は、学際的で国境を越えた探求に取り組み、新しい、未開発の場所やダイナミクス（その多くはそもそもグローバルで、トランスローカルで、多文化的なものである）へと研究を導いていく幅広く場所一類型に基づいた都市計画史のアプローチを明らかにする。「将来」についての第4部は、現在の研究の焦点と将来の研究のために開かれつつある展望を指摘することで、今後の研究に役立つトピックについての新しい展望を明らかにするエッセイで構成されている。それぞれの部はそれぞれの時系列的、テーマ的、学術的論理を有している。

このハンドブックは都市計画史のこれまでのストックを再見し、それを都市計画に再接続し、とりわけグローバルなスケールでの将来の方向性を明らかにする。研究者や実践家に都市計画の再考を要求する。過去からの教訓を明らかにし、それらを持続と変化の歴史のより大きな文脈の中に位置づける。グローバルな状況下で都市計画を比較することの困難さを認識しつつ、都市計画史やその歴史記述を分析する。トピックの選択は、政治的な議論や社会変化、ランドスケープからインフラストラクチャー、住宅から社会的公正やコミュニティ形成へという変化の説明を反映し、それらと同行し、先行する。それぞれの章は、それぞれの論考、著者、方法を一般的な政治、経済、社会、地理的な文脈に位置付ける。このハンドブックは理論的、方法論的、歴史的、比較、グローバルな都市計画史へのアプローチを、先例のない包括的で総合的なアプローチへと統合していく。